

海外エネルギー事情研修会に参加して

青森明の星高等学校 藤村 笑吏

私は、以前からエネルギーや海外の文化や交流に興味があったので、実際に海外へ行き、エネルギー施設を訪れたり、現地の高校生と交流するという経験ができたことを、本当にうれしく思います。1月28日から2月9日の約2週間を振り返ってみると、あっという間に毎日が過ぎていったような気がします。事前研修を含め、エネルギー関連施設の見学や、海外の高校生との交流などを通して、多くのことを学びました。研修自体は短い期間でしたが、この2週間で得たものは非常に大きいものでした。

フランスのラ・アーグ再処理工場では防護服を着ながら施設見学をしました。六ヶ所の施設の手本になったということで、似ている印象を受けました。停電や地震などの不慮の事故への安全対策も厳重に施されており、安全対策をしつかりすることで原発との共存は可能ではないかと改めて感じました。

スウェーデンのフォルシュマルク中・低レベル廃棄物貯蔵施設や原子力発電所PR施設の見学ではスウェーデンの原子力の再処理に対する考え方につれ、再処理することにとらわれないこと、日本とは違い、地震がないことから、日本ほど否定的ではなく、柔軟性を感じました。

両国の施設を見学し、ディスカッションで感じたことは、安全対策は厳重に施されている・国民は原子力に対して寛容である、ということです。日本のようにただ恐れているわけではないと感じました。よく分かっていないのに原子力に不安を抱いている現状を今後、変えていかなければならぬと思いました。

現地の高校生との交流では、英語での会話だったので、最初は緊張していました。実際、会話をしていると、思うとおりに英語が出てこないことが何度もありました。そんなときはジェスチャーや分からぬ言葉を言い換えたりして、“言葉の壁”を乗り越えました。私のつたない英語を、相手は遮ることなく理解しようしてくれたことも大きかったです。会話の内容としては他愛もないものでしたが、気軽に会話を楽しむことができました。学校訪問が終わった後は、facebookやSkypeを通じて交流しています。後日、facebookを開いて見たら、向こうで知り合った人たちから“会えてよかったです、ありがとう”、“無事に

着いた？”という内容のメッセージが届いていて、とても嬉しく、感動しました。

海外の高校生と話していて気がついたことがあります。それは、多少の文法や発音の間違いにこだわっていないこと、自分の考えを持っており、積極的に発言できる人が多いことです。交流の際、相手の英語が間違っているときもありましたが、そのことにとらわれず、会話そのものを楽しんでいました。ディスカッションのときには、エネルギーに対しての自分の考えを持ち、それを堂々と発言する姿を見て、日本の高校生との違いを感じました。

海外の高校生と比べてみると、日本の高校生は積極的に発言しようとしない傾向にあると思います。私も、この研修会に参加するまで、間違うことが怖かったり、周りの目を気にして発言することに躊躇してしまうことがありました。ですが、この研修会中は“せっかく貴重な体験ができるのだから、受身にならない・発言することを恐れず、物怖じせずにいよう！”と決めていました。会話をするときは、積極的に話すように心がけました。その甲斐があったのか、会話の時間はとても楽しいものになりました。

今後、日本でも自分の意見を持ち、発言ができるような教育と環境づくりをしていくべきだと思います。日本人は“奥ゆかしい”だけではなく“積極性”も併せ持つことが、これからの中の国際社会で求められていくのではないでしょうか。

思い返してみると、日常生活では経験することのできないことばかりで、エネルギー事情はもちろん、日本との相違点など学ぶことがたくさんありました。海外に友人もできました。私にとって研修会で過ごした2週間は、海外から日本を見つめる機会となり、様々な面で成長できたと思います。

最後になりますが、このように貴重な経験をするきっかけを与えてくださった皆様に心から感謝いたします。本当にありがとうございました。